戦後日本の「アメリカニゼーション」と『ブロンディ』

岩本茂樹

本報告の企図

チック・ヤング作の４コマ漫画『ブロンディ』を軸に、敗戦直後のアメリカ生活文化受容の姿をたどる。

1949 年 1 月 1 日に『朝日新聞』に連載され、1951 年 4 月 15 日をもって中止という謎から、仮説ではあるが、言論統制下の朝日新聞社の戦術に迫る。

＜注：報告は拙著『憧れのブロンディー戦後日本のアメリカニゼーション』2007 年をもとにする＞

１.『ブロンディ』の言説

（１） 振り返っての『ブロンディ』の語り

・現代の研究者：「戦後日本のモデル像」

「占領下で日本人がこの漫画に見たものは、まず電気冷蔵庫、電気洗濯機、電気掃除機にはじまって、居間、食堂、浴室、寝室のダブルベッドという『モノ』の威力であったことは疑いない」［安田常雄、1995：265-266］

「アメリカ的生活様式へのあこがれは消費生活の豊かさ、生活をささえる機能的装置群に集中した。それは、ブロンディの漫画における冷蔵庫（そのなかにはいつも食料がつまっており、分厚いサンドイッチがすぐにつくれる）、洗濯機、テレビ、自動車などに象徴されるくらしであり、アメリカ映画もその媒体であった。」［石毛直道、1987:40］

・読者　：「家庭電化製品に溢れた生活」「消費生活の豊かさ」

「家事合理化が進んでいて、電気掃除機、電気洗濯機が使われ、風呂は、自動給湯機つきだし、大きな電気冷蔵庫には、ハム、ソーセージ、タマゴがいつも入っている。ダグウッドは、夜食に大きなサンドイッチを作って、ベッドでパクつくのである。

私たちは、こういうアメリカ式生活様式を、『ブロンディ』で知って、『いつになったら、こんな豪華な生活ができるのだろう』と、半ばあきらめ気分で、アメリカを夢みたのであった。『ブロンディ』は、アメリカの日常生活が印刷されたショーウィンドウであった。」［山本明、1986:110-1］

（青田安子）「亭主のダグウッドが家庭のなかで小さくなってオドオドしているのに、ブロンディの若々しく活動的なこと、それも手を汚さないで掃除や洗濯のできる電化生活と何か関係があるように思っていました」［天野正子・桜井厚、1992:137］

（２） 掲載当時『ブロンディ』

・研究者：「哀れな俸給労働者」「機械的人間」

「毎日あくせく働いても彼等は思う存分肉を食べるわけにはゆかない。子供にこずかいやるにも考え、帽子をかうにも頭をなやまし、電気の節約に寸秒を争い、たまの外食も渋らなければならない。それはみじめな生活である。」［今村太平、1953=1992：234］

「ただ、ブロンディが機械化した社会に完全に安住し、自己をやすやすと機械化し、そのこはばりを彼女自身感ぜず人にも感じさせないほど寛いでいるのに反して、ひたすら休息を欲するダグウッドはそれだけ機械化した社会を圧迫として受け取っていると、いうことだけを指摘しておこう」［矢内原伊作、1950：59］

２．探求のバックボーン

・言説のズレから「アメリカの生活文化の剥ぎ取ったもの」とは？

－咀嚼の様　[『日常的実戦のポイエティーク』Certeau、1980=1987]－

「つまり、インディオたちのやりかたにならって、使用者たちは、支配的文化のエコノミーのただなかで、そのエコノミーを相手に『ブリコラージュ』をおこない、その法則を、自分たちの利益にかない、自分たちのだけの規則にしたがう法則に変えるべく、細々とした無数の変化をくわえているのではないか、ということだ。うごめく蟻群にも似たこの活動について、その手続き、それを支えるもの、その及ぼす効果、そしてその可能性をさぐりだす必要があるだろう」[Certeau,1980=1987:16]

－社会的知覚

ガストン・バシュラール「認識論的障害」

「人は、世界すべてを知覚することができずに、剥ぎ取りを行いながら見ている」

[Bachelard『科学的精神の形成』1938=1975:19]

ピエール・ブルデユー　　発信者の背後にある客観性

「対象化された主観性の記述は客観性の内在化された記述を暗に示している」

[Bourdieu、『写真論』1965=1990:4]

３.『ブロンディ』とは

3-1 掲載当時の読者　:「主権在主婦」「快い嫉妬」

「この漫画の全体の魅力は、バラバラに見ないでまとめて観賞すればわかることだが、**適当に“カカァ天下”であると同時に過不足なく“テイシュ関白”である**ところの、平和にして愛情あふれる安サラリーマンの家庭を描いたところにあるのだろう。・・・略・・・洋服を着る国の人間ならだれにでも通じる善良な凡人一対の心理をよくとらえている。」[清水崑、1949.1.21 付]

「それにしても、我々の家庭と比べて、なんという相違であることか。日本の主婦も、亭主より賢くなる時代がきたら、やはり、**ブロンディー家のように、主権在主婦**になるのであろうが、その将来は近いか、それとも遠いか。」[獅子文六、1949:26-27]

3-2 『ブロンディ』の舞台装置・道具、及び内容の頻度

（1949.1.1～1951.4.15　合計 734 日）

舞台装置・道具

-家庭電化製品類-		-他の道具-	
冷蔵庫	87　(20)	ほうき	11
掃除機	18　(12)	ちりとり	1
洗濯機	4　(2)	モップ	6
電気パン焼機	3　(3)	芝刈り機	5
ラジオ	3　(2)	ゆたんぽ	3
テレビ	3　(0)	パーソナルチェアー	137
アイロン	4　(2)	ソファ（寝イス）	77
ヘアードライヤー	1　(1)		
電気缶あけ機	2　(0)	サンドイッチ	33
合　計	125　(42)	車	1

内容

-家庭の内容-		夫の家事手伝い	
食事	142	皿洗い	21
睡眠	88	掃除	7
昼寝	53	修理	10
入浴	35		
出勤を急ぐ	25	妻から夫への指示	155
キス	25	夫から妻への指示	20
買い物	73		
		-仕事の内容-	
読書等		賃上げ	3
夫の読書	114	遅刻	1
妻の読書	25	昼寝	4
編み物	9	その他	8

４．知覚の網（バイアス）

読者

電力で動くものかどうかあいまいに

・・・読者は“あいまいさ”のベールを剥ぎ取り 過剰に電化製品を知覚した。

掲載時の研究者

今村　：賃金奴隷としての哀れな俸給生活・・・マルクス主義的世界観

矢内原・南：機械人形・自動人形・・・『モダンタイムス』1936 年

５．バイアスの背景

・科学技術＝真理

トンボ鉛筆の広告：「原子爆弾は！建設の為の破壊に使用された。・・・略・・・そして限り無き文化の前進は続けられてゆく。勤惰異文化が誇る最高至上の文化材超微粒子特殊油浸透芯製トンボ、ペンシルの御愛用を！！」[1946]

「原爆の完成には殆どあらゆる反ファシズム科学者が熱心に協力した。これらの科学者はたいてい人道的である。かれらの仕事が非人道的な理由がない」[武谷三男、1946]

・「科学技術＝真理」と「アメリカのイメージ」の一体化

６．日本独自のアメリカ生活文化の受容

6-1 アメリカ生活文化の咀嚼とスルー

科学という真理の込めた家電製品に、明るい未来 が！

浸透のズレ・・都合の良い受容　　「主権在主婦」の定着・・・・？

家庭内民主化としての夫の家事（手伝い）

＜家電を手に入れることが男性の役割＞
女性の家事労働負担の軽減
男性の「女性への思いやり」という民主主義に改変

6-2 失われた日本文化－
建築家の安藤忠雄（1941 年生）「思考停止を脱しよう」
「現代の日本の問題点は、モノはあふれているが、創造力がなく、
誇りを失っていることにある」［2005.1.7 付］
久世光彦（1935 生）「縁側に忘れた『連帯感』」
「日本の良き伝統文化が捨て去られ 、物質を手に入れたが、
「思考停止」の状況」［2005.1.6］
＊・戦後の人々が自分たちに都合よくアメリカの生活文化を受容
・戦後社会の負をアメリカによるものと付与する可能性が含意
・・・・狭義のナショナリズムに陥らないために！

7.『ブロンディ』掲載の仮説
『ブロンディ』の日本上陸
・朝日新聞と『ブロンディ』
週刊誌・新聞ともに掲載に関わった朝日新聞出版局渉外課長長谷川幸雄
（単に『ブロンディ』漫画掲載功労者として、『朝日新聞』訃報欄で紹介 1990.7.19）
［推測］『ブロンディ』掲載の謎：新聞社の窮地を救うべく切り札にした『ブロンディ』
－連載開始－
1949 年『朝日新聞』連載 － 1948 年 12 月『日本評論』「プレスコード違反疑い」
出頭命令
10 月･11 月号伊藤律論文「新たなるファシズムに抗して」
新聞課長インボデン→ 編集長:野口肇退社
12 月事件 雑誌『改造』編集者 4 人が馘首
労組による壁新聞「配給砂糖にダニがいる」: 占領批判
＜社長山本実彦が「占領政策批判」として CIC(民間情報局)に売った＞
◎『朝日新聞』全国版に報道 ← インボデンの逆鱗に触れる（公にされた）

1946 年 6 月『週刊朝日』連載 － 1945 年 9 月 18 日 GHQ から業務停止命令
9 月 18 日午後 4 時から 48 時間
鳩山一郎（後の首相）による原爆投下を批判する談話を掲載
これにより 9 月 19 日付と 9 月 20 日付の朝刊が休刊
1946 年 5 月に CIE 新聞局課長バーコフからインボデンへ
＊ 言論統制：ニューディーラー（非軍事化・民主化）から反共 逆コースへ
＊朝日新聞社自らが GHQ へ摺り依り（仮説）
・『週刊朝日』連載開始:業務停止処分のマイナスを補うべく、**占領軍への忠誠のシンボル**」
・『朝日新聞』連載開始：(『週刊朝日』の戦術に倣い）朝日新聞社の保身の担保・**占領軍へ**

の恭順のシンボル

1951 年 4 月 15 日で『ブロンディ』中止　－　マッカーサーと共に去る

「さようならマ元帥！　*さよならブロンディ！*」

◎巧みな技？：新聞誌面の３面記事の隅に政治色のない４コマ漫画で、新聞社存続・発信

参考文献

Bachelard, Gasotn, *La Formation de l' esprit scientique,* Contribution a une psychanalyse de la Connaissance objective, J.Vrin, 1938（及川　馥・小井戸光彦訳『科学的精神の形成　－客体認識の精神分析のために－』国文社、1975 年

Bourdieu, Pierre et Boltanski, L., Castel,Robert Chamboredon,J.-C., *Un art moyen - essai sur les usages sociaux de la photographie*-, Minuit,1965（山口熙／山縣直子訳『写真論　-その社会的効用-』法政大学出版局、1990 年

De Certeau, Michel, *L' Invention du qutiodien,1, Arts de faire,* U.G.E.,coll.10/18, 1980（山田登世子訳『日常的実践のポイエティーク』国文社、1987 年）

井出孫六『ルポルタージュ　戦後史』上　岩波書店、1991 年

今村太平「アメリカ漫画と日本漫画」『芽』思想の科学機関誌、1953 年　[『漫画映画論』同時代ライブラリー　岩波書店、1992 年]

石毛直道「衣と食と住と」祖父江孝男編『日本人はどう変わったのか　戦後から現代へ』NHK ブックス、1987 年

五百旗頭真『米国の日本占領政策』上・下　中央公論社、1985 年

Markovsky, Barry, "Social Perception", in Foschi, Martha & Lawler, Edward J. (Ed.), *Group Processes, Sociological Analyses,* Nelson-Hall, Inc, 1994

南 博「『ブロンディ』の悲劇-アメリカ型『テスト』のユーモア-」『日本評論』日本評論社、1950 年（『アメリカそして中国［南博セレクション　1]』勁草書房、2001 年）

作田啓一「戦後日本におけるアメリカニゼーション」『思想』第四号 岩波書店、1962年

清水 勲『サザエさんの正体』平凡社、1997年

獅子文六「ブロンディ一家」『ホーム』ホーム社1949年5月号（プランゲ文庫）

鶴見俊輔「物語漫画の歴史」『限界芸術論』勁草書房、1967 年（『世界評論』1949 年 7 月号所収）

山田正吾／森彰英『家電今昔物語』三省堂、1983年

山本明『戦後風俗史』大阪書籍、1986年

安田常雄「アメリカニゼーションの光と影」中村政則・天川晃・尹健次・五十嵐武士編『戦後日本　占領と戦後改革　第 3 巻　戦後思想と社会意識』岩波書店、1995 年

矢内原伊作「ブロンディ論　－現代人の笑いについて－」木村徳三編『人間』第５巻　第四号　目黒書店、1950 年 4 月 1 日

吉見俊哉「アメリカナイゼーションと文化の政治学」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・吉見俊哉『岩波講座現代社会学１　現代社会の社会学』岩波書店、1997 年

図2-19［『朝日新聞』1949.12.9付］

図2-9［『朝日新聞』1950.9.1付］

図2-11［『朝日新聞』1950.10.4付］

図2-21［『朝日新聞』1949.8.29付］

1950. 4. 25